

平成 2 7 年 6 月 3 0 日現在

機関番号：23401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530731

研究課題名(和文) M.E. リッチモンドのソーシャルワーク構想の研究

研究課題名(英文) A Study on Social Work designed by M.E. Richmond

研究代表者

日根野 建 (HINENO, Tatsushi)

福井県立大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：30388657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究では、リッチモンド(Richmond, M.E.)の思索に焦点をあわせて、ソーシャルワークの視座を歴史的かつ理論的に探究した。個別支援を志向するソーシャルワークは、地域社会の個別状況に自助と共助を一体的に創造する。このとき、公助に訴えかけ、かみ合わす試みもそのソーシャルワークの重要な仕事である。また、個別支援を志向するソーシャルワークは現代社会に独特な人間尊重の仕方を提供する。そこでは、人間の精神を社会関係の総和として把握して個人を地域社会で接遇する。今日のソーシャルワーク研究も、このことを起点としたいものである。

研究成果の概要(英文)：This is a historical and theoretical inquiry on social work perspective focused on M.E. Richmond's thought. Social work with individuals and families creates self-help and mutual assistance simultaneously in social-case of communities. Then awakening public assistance and engaging it to the social-case is also social worker's missions. In addition, social work with individuals and families offers unique procedures to respect individuals' lives in the modern society. They respond every personality as a sum of social relations in a community. The above is a base point of social work studies even today.

研究分野：社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク アメリカ 国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

(1) リッチモンド (Richmond, M.E.) は、ケースワークの母として著名である。彼女には、ソーシャルワークを専門的な職業として現代社会に組みこむ構想があった。しかし、彼女やソーシャルワークに関する先行研究ではこのことが不明瞭である。

(2) 2000 年制定の社会福祉法は、地域福祉を理念として前面にうち出した。そして、2007 年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正は、ソーシャルワークの新展開を期した。ただし、そこではソーシャルワークの本質的かつ包括的な構想は不十分であった。

2. 研究の目的

(1) ソーシャルワークの視座は、人間個々と社会環境の間というのが定説である。この視座の構築は、リッチモンドの大成したケースワークにさかのぼる。なぜ人間個々と社会環境なのか、人間個々と社会環境とは何かを探究する。

(2) リッチモンドは、「応用博愛学校」といった教育機関や、「米国ソーシャルワーカー協会」といった職能団体の整備を主唱した。このソーシャルワークの専門職化がケースワークの大成とどのように関係したのか解明する。

3. 研究の方法

(1) 文書史料の検討を中心とした米国ソーシャルワークの歴史的ないし古典的な研究である。リッチモンドの人物史のほか、彼女の著作を対象とした理論史の観点にたつ。ここでは、教育機関や職能団体に関する彼女の事績をも追う。

(2) 以上を、リッチモンドの刊行著作や先行研究のほか、主にコロンビア大学 Rare Book & Manuscript Library や Rockefeller Archive Center に所蔵する彼女の手稿や書簡といった 1 次資料の閲覧と収集を通じて行う。

4. 研究成果

(1) ソーシャル・ケースを注視するリッチモンドには、文学少女のまなざしとユニテリアンの性質があった。

リッチモンドは、幼少期には C.ディケンズを、青年期には G.エリオットなどビクトリア朝文学を愛好した。シェイクスピアをふくめ、このことは彼女の生涯にわたった。文学は、書き手と読み手の想像力を介した共同作業である。彼女の第 1 の著作『貧困者に対する友愛訪問』(1899 年)にも文学少女のまなざしが生きる。ソーシャル・ケースの観念には、文学的な感性がにじむ。

また、リッチモンドには社会福音運動を率先するユニテリアンの信仰があった。彼女の

第 2 の著作『現代社会における善き隣人』(1907 年)は、善きサマリア人の聖句が冒頭をかざる。ここでは、ソーシャル・ケースの観念が隣人愛の実践を示す。また、彼女はユニテリアンの信仰と関係して R.W.エマソンに傾倒した。自己の神性を信じて他者や世界と普遍の関係に生きるのが自己信頼である。このことを、ソーシャル・ケースの自助原則の根幹に彼女はすえた。

ケースワークは、慈善組織協会のケース・メソッドに由来する。リッチモンドは、このケース・メソッドにソーシャル・ケースの観念を投入した。このことは、個別支援を志向するソーシャルワーク論の学問開拓や、ソーシャルワーカーの養成教育に深く関係する。

(2) 著作『貧困者に対する友愛訪問』と著作『現代社会における善き隣人』は、後年ケースワークを大成するリッチモンドの思索の道程である。

従来 of 慈善組織協会に対して、第 1 の著作では個人と社会の相互関係で貧困が生じるという見方を示した。また同時に、慈善活動の組織化を家族生活の組織化に移し、生活全体の側面各々の相互連環の対処を訴えた。

一方、第 2 の著作では貧困施策の個別支援に対して慈善団体のみならず地域住民の協力を訴えた。くわえて、そこでは社会制度の整備を追求する社会改良運動に対する慈善組織協会の個別支援の意義を示した。

以上には、ケースワークの視座の萌芽があった。

(3) ケースワークを大成する著作『社会的診断』(1917 年)は、上記の二著作を包摂させてケースワークの手順を専門技術として確立する試みであった。

リッチモンドは、1911 年の講演「ソーシャルワークの初期過程の技術について (Of the Art of Beginning in Social Work)」で、『社会的診断』の執筆主旨を明確に発表した。また、同年には「社会サービスにおける治療の初期段階 ケースワーカーのための教科書 (First Steps in Social Service Treatment: A Text Book for Case Workers)」としてその内容と構成を確定させた草稿も仕上げた。

この内容と構成は、1914 年ニューヨーク博愛学校のケネディ講座「ソーシャル・ケース・ワークの初期段階 (First Steps in Social Case Work)」で洗練をうけたことがその案内状から明白である。ここでは、社会的調査を進める社会的証拠の概念をうち出し、社会的治療にむけた社会的診断の手順の確立をうかがわせる。

以上のように、リッチモンドにはケースワークの大成に向けて早い時期から具体的な構想があった。

(4) リッチモンドの説明では、ケースワークの視座は次のとおりである。ワーカーは、

社会的困難と全体的人間を見る。そして、「ワーカーは、クライアントのパーソナリティの発達をめざして、個別状況の社会関係に着眼する。社会的困難や全体的人間といった概念をまとめるのは、ケースワークの基本的哲学である。この基本的哲学は、個人の差異化と自己の拡大化の2点に集約できる。このことは、ワーカーの視点は理論的に社会関係であることを示す。

まず個人の差異化とは、一人ひとりに適する違ったことをなすという民主主義の考え方である。リッチモンドは、この考え方で個別化を重視するケースワークの存在意義を主張した。たしかに、すべての人々に対して同様のことをなすという民主主義の考え方もある。この考え方は、社会制度の整備に向けた社会改良運動の基礎であった。社会制度の特徴は一律性にあるが、その展開には個別化も必要となる。個人の差異化は、社会改良運動とケースワークの役割を両立させる概念であった。

また同時に、個人の差異化はクライアントの主体性を尊重する概念でもある。当初 COS では、与え手本位の救済の論理があった。しかし、クライアントという用語自体、そこをぬけ出す。クライアントとは、専門職者のサービスを依頼する顧客を意味する。リッチモンドは、民主主義の考え方をすえてそのクライアントの主体性を明確にした。同時に、この用語の採用はソーシャルワークの専門職化をはかるねらいもあった。

次に、他方の自己の拡大化という基本的哲学である。この概念には、人間の精神は社会関係の総和であるという考え方がある。リッチモンドは、当時の心理学説をもち出してこのことを説明した。自己は他者と出会い意識が生じ、関係のなかで自己が整形し成長する。また、多彩な社会関係は自己を変化させて成熟もさせる。ここから、リッチモンドは人間の精神は社会関係の総和であるとし、人間とその生活の社会性や全体性を包みこむ理論的な説明をした。ケースワークの定義は、人間個々と社会環境の間を調整してパーソナリティを発達させる過程であった。この人間個々と社会環境の間は、社会関係である。また、パーソナリティは社会関係の総和である。社会関係を調整してパーソナリティの発達を期するのが、ケースワークなのである。また、個人の差異化や自己の拡大化といった基本的哲学は当時の社会学説の反映でもあった。そこでは、個人の差異化は個性化という。また、自己の拡大化は社会化という。社会関係の形成や変化は、この社会化をすすめる。そして、この社会関係の多様な変奏は個性化をすすめる。このことは、健全な民主主義社会の建設につながる。社会学説では、個性化と社会化は一對の概念である。ここでは、パーソナリティの発達を期するケースワークは民主主義社会を醸成することにも深く関係する。ワーカーの視点は、社会関係に射

しむいてクライアントの個性化と社会化をめざす。そして、この個別状況をめぐる努力が地域社会の民主化にもつながる。これを具現するのが、社会関係の中間者や証言者という働き」である。

(5)以上から、個別支援を志向するソーシャルワークの視座について、次のようにまとめることができる。

「ワーカーは、自助と共助が相互関係にあり、自助と共助の両立を個別状況ではかるという視点をもつ。

当初 COS は、自助の促進を面的に強調した。他面、セツルメントは共助の努力を志向した。しかし、リッチモンドは社会的困難という概念で、貧困の個人的責任を押さえた上で、貧困の社会的責任を同時に認めた。そして、全体的人間という概念で個人のみならず家族や地域に視野を広げ、また生活全体の側面の相互連環を視野に収めることを訴えた。

このことは、自助はひとりで成立しないことを意味する。逆に、共助のひびきに呼応して自助が成立することを意味する。もちろん、自助なくしては共助も成立しないだろう。自助と共助は、相互関係にあり両立が本来の姿である。このことは、社会関係が人間の個性化と社会化を同時にすすめて、地域社会を民主化するという理論的な説明にも合致する。社会関係の中間者や証言者といった働きは、自助と共助の融合を個別状況に創造することにほかならない。

人間の精神は、社会関係の総和であった。ワーカーは、社会関係の間を取りもつ。このとき、一人ひとりの社会関係の総和を整えなおす視点をもつ。また、社会改良運動が整備する社会制度は公助である。ワーカーは、この公助を自助と共助にかみ合わせる視点をもつ。

ソーシャルワークの視座が指導するワーカーの「手順は、個別状況の社会関係を理解して、クライアントや家族に対する人間尊重の独自の仕方を地域社会に注ぎこむ。

当初、COS の調査や決定には与え手本位の恣意的な救済の論理があった。そこでは、救済履歴の有無をはじめ貧困の程度や自助の可否を確認して、金品給付を行うか否か、また友愛訪問員を派遣するか否かを検討するうえで、濫救や漏救を防止する立場はあっても論理的な必然性を突きつめる関心は希薄であった。しかし、社会的証拠や社会的診断という着想は客観的な妥当性を追い求めた。

社会的証拠や社会的診断には、法曹や医師にならないソーシャルワークの専門職化を期する目的があった。ただし、このことは用語上の体裁作りではない。このワーカーの手順には、まず学術の世界の反映がある。リッチモンドは、論理学をはじめ歴史学の史料批判や刑法学の証拠認定の方法を参照した。1917年の彼女の著作『社会的診断』には、歴史学

者や刑法学者の校閲といった応援もあった。また、ワーカーの手順には医師の作法の影響もある。リッチモンドは医師の作法を慈善活動にも尽力した医師の講演や著作からも学びとった。ここでは、確実に歴大な科学知見の蓄積に基づく医師の診断の志向を導入する道をつけた。

ワーカーの手順は、個別状況に應對し地域社会を領野として展開をはかる。ここには、クライアントや家族に対する地域社会の独自の人間理解と人間接遇がある。また、社会的証拠に基づく社会的診断の客観的な記述は、地域社会の各所に独自の人間尊重の仕方を醸成する。具体的には、社会制度の整備に向かう社会改良運動を要請するという社会的治療の展開が一つにある。また、医療や司法といった分野にもワーカーの手順が独自の人間尊重の仕方でも貢献する。医療ケースワークでは、個別状況の社会関係の理解を供することで医師の患者に対する診断と治療の視野を広げる。一方、司法ケースワークでは同様に個別状況の社会関係の理解を与えて少年の審判と処遇に影響を与える。このことは、社会的証拠に基づく社会的診断の客観的な記述があってこそのことである。」

(6) リッチモンドは、ソーシャルワークの専門職化には常に逡巡した。たしかに、『社会的診断』はソーシャルワークの専門職化の歩みを進めた。しかし他面では、彼女の内面に独特の専門職像があったのも事実である。専門職化に伴う精鋭主義 (elitism) を排し、クライアントと社会的に同じ地平にたち人間として台頭に向き合う姿がその理想であった。

なるほど、『社会的診断』でケースワークの専門技術を著した際にも彼女の専門職像が顔をのぞかせる。未掲載に終わった原稿には、援助関係を侵すおそれのある専門職化の悪弊に注意を喚起する。一つは、ワーカーは常に真実を語り、目的や計画を十分に説明し、クライアントとの約束と他関係者との約束を矛盾なく一貫させる習慣を説く。また、いま一つはワーカーがクライアントの愚行や強情を叱責することや、1つの課題に執着しクライアントに強要することに警鐘をならす。

リッチモンドが立ち上げたソーシャルワーカーの職能団体に関する委員会が練り上げた最初の倫理綱領の草案にも、このことの明記が端的にあった。そこには、「威張ってはならない」(Don't be bumptious)の文言がある。この委員会の活動は、最終的に1921年に米国ソーシャルワーカー協会を結成させた。

リッチモンドは、同年にスミス大学より新しい専門職業の科学基盤を確立したとして修士学位の授与をうけた。しかし、スミス大学は精神医学ソーシャルワークの牙城であり、彼女の専門職像とは相容れない専門職化

を広めた。ソーシャルワークに相応しい特有の専門職化の方途を、リッチモンドの専門職像に学び直す意義がここにある。

(7) 以上のように、リッチモンドの大成したケースワークをめくり、なぜ人間個々と社会環境なのか、人間個々と社会環境とは何かといった問いに対して一定の成果はあった。しかし、教育機関や職能団体に関する彼女の事績に関しては史料発掘には一定の成果があったものの、いまだ全貌をあらわにし切れずその成果発表は不十分に終わった。今後の継続的な課題である。ただし一方で、人間の精神は社会関係の総和であり、この社会関係を整えなおすというソーシャルワーク特有の面接技法の研究にむけた新しい着想も芽生えた。このことも今後の課題としたい。

引用文献

日根野建、5分で読むソーシャルワークのかたち リッチモンド再訪(冊子) 福井県立大学日根野建研究室、2015年、8-9,13

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

日根野建、M.E.リッチモンドのケースワーク論—『社会的診断』(1917年)について、天理大学人権研究室紀要、査読あり、Vol.18 2015、pp.37-48

〔学会発表〕(計1件)

日根野建、関西大学堺キャンパス、ケースワークの視座形成—リッチモンドの前半生と二著作、2012

〔図書〕(計2件)

日根野建、福井県立大学、ようこそ県大研究室 vol.3 (ソーシャルワーカーの歴史と仕事) 2014、pp.138-143

日根野建、ミネルヴァ書房、人物でよむ西洋社会福祉のあゆみ (M.リッチモンド—ソーシャル・ケース・ワークの母) 2013、pp.155-161

〔その他〕

日根野建、福井県立大学公開講座小浜キャンパス、おたがいさまの福祉相談—社会福祉の古典に学ぶ(講演) 2014

日根野建、福井県立大学日根野建研究室、5分で読むソーシャルワークのかたち—リッチモンド再訪(冊子) 2015年

日根野建、福井県立大学日根野建研究室、ソーシャルワークの面接技法について—ヘルピング・トークの主要技法(冊子) 2015

6 . 研究組織

(1)研究代表者

日根野 建 (HINENO, Tatsushi)
福井県立大学・看護福祉学部・准教授
研究者番号：30388657